

終助詞のコミュニケーション機能の分類と日本語学習者を対象にした終助詞に関する研究概観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄭, 穎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1198

〔レビュー論文〕

終助詞のコミュニケーション機能の分類と 日本語学習者を対象にした終助詞に関する研究概観

An Overview of Studies of Japanese Sentence Final Particles and Research on Acquisition of Those Particles by Learners of Japanese

鄭 穎

キーワード：終助詞の機能、モダリティ、発話意図、イントネーション

1. はじめに

日本語ではコミュニケーションにおいて終助詞が多く使われるが、どの終助詞を使用するかは話し手の態度や発話意図によって異なる。つまり、終助詞は日本語コミュニケーションにおいて大きな役割を果たしており（伊豆原 1993、初鹿野 1994、白岩 2011、崔 2015 など）、適切に使用することが円滑なコミュニケーションに不可欠である。

1990年代以降に第2言語習得研究の一環として、学習者を対象として終助詞に焦点を当てた研究、特に「ね」の習得を検討した研究が多く行われるようになった（白岩 2011）。これらの研究から、上級学習者になっても終助詞の不適切な使用が多く見られるなど、学習者の終助詞の習得には難しさがあることが指摘されている（大嶋 1989、伴・架谷 1996、張 2005）。これは終助詞が文法的機能とともにモダリティ機能を併せ持っていることに起因する可能性が考えられる。

学習者の終助詞の習得を調べた研究においては、研究によって研究課題、対象者、調査方法などが異なっている。どの研究においても終助詞の習得が難しいことが指摘されている点は共通しているが、どのようなデータを基に調査しているかによって、すなわち、筆記テスト、口頭産出、既存のデータベースなどを分析対象とする調査材料によって、導き出された結果には違いがある。研究方法に焦点を当てて終助詞「ね」の習得研究を概観した朴（2018）では、自由会話と空白埋めテストでは「ね」の機能別の使用頻度や誤用が異なることが明らかになっている。また、自由会話や空白埋めテスト以外にも、多肢選択式テスト、メールやチャットなどの産出文の分析、インタビュー形式の面接テストなどの方法が用いられている（大嶋 1989、初鹿野 1994、清家 2013 など）。そのため、本稿では学習者を対象として行われた終助詞研究を研究方法という観点から整理したい。

学習者を対象とした終助詞に関する研究を整理するためには、まずは終助詞の機能など、終助詞に関する研究を概観する必要がある。そこで、本稿では終助詞のコミュニケーション機能がど

のように分類されているかという観点から主な先行研究を整理すること、及びこれまでに行われた学習者を対象とした終助詞研究を概観することを目的とする。

これまでの終助詞に関する研究は、終助詞の機能という観点から分析されているものが多い。例えば、伊豆原（1993）、井上（1999）、崔（2015）などでは、談話場面に注目して文法機能だけを検討している。しかし、終助詞は話者の発話意図や態度を表すためのモダリティ表現として多用されており、そこには音調も深く関わっている。例えば、「猫だよ。」の「よ」の音調をあげると情報を知らせるという意図であり、反対に音調を下げると「これは猫だ。」と強調する意図が伝わる。このようにイントネーションによって同じ終助詞を使用しても発話意図や態度は変わる。したがって、終助詞の研究において文法機能だけの検討では不十分であり、音調も含めて研究していくことが必要だと考える。そのため、本稿では終助詞の音調について紙幅を割いて記述する。

学習者を対象とした研究について整理する前に、まず第2章でモダリティ表現と終助詞の関係について述べ、第3章で終助詞のコミュニケーション機能の分類、第4章で終助詞の機能と音調の関係について述べる。その後、第5章でこれまで行われてきた学習者を対象とした終助詞研究の一部を取り上げ、研究方法ごとに結果を整理する。最後に第6章で学習者を対象とした終助詞研究の今後の方向性について述べる。

2. モダリティの定義と終助詞の位置づけ

益岡（2007）は、文の意味的構成について、「事態を表す領域と話し手（表現者）の態度を表す領域」という2つの領域からなるもの」と述べ、後者を「モダリティ」と定義した。益岡（2007）によれば、「モダリティ」には「判断のモダリティ」「発話のモダリティ」「特殊なモダリティ」という3つの種類があるという。この3種類のうち、「発話のモダリティ」には「発話類型のモダリティ」と「対話のモダリティ」という下位分類があり、さらに、「対話のモダリティ」は「丁寧のモダリティ」と「対話態度のモダリティ」に分類される。終助詞はその中の「対話態度のモダリティ」に属するとされる。益岡（2007）は、この「対話態度のモダリティ」は対話文専用の形式であり、これに属する終助詞も「対話的な性格」を持っていると述べている。

- ・判断のモダリティ—真偽判断のモダリティ、価値判断のモダリティ
- ・発話のモダリティ
 - ↳ 発話類型のモダリティ
 - ↳ 対話のモダリティ—丁寧のモダリティ、対話態度のモダリティ
- ・特殊なモダリティ—説明のモダリティ、評価のモダリティ

益岡（2007：5）

また、益岡（2007）では「対話態度のモダリティ」の代表的な表現形式として終助詞の「よ」「ね」「よね」が挙げられている。終助詞は主に文末に用いられることから、「文末詞」とも呼ばれ、聞き手に対する情報提示を調整する機能を担っていると述べている。例えば、命令形としての「来て」を「来てよ」と発話すると、「よ」が使われたことによって、単なる「来てほしい」という情報の他に、催促や注意などの話し手の態度が新しい情報として聞き手に伝達される。

終助詞「よ」に比べてさらに顕著な対話的性格を持っているとされたのが終助詞の「ね」である。「ね」に関しては終助詞の中でもっとも多く検討されており、「ね」だけに注目してその文法機能や談話上の役割、学習者による習得過程や傾向などを考察している研究も多く見られる（伊豆原 1994、初鹿野 1994、伴・架谷 1996、張 2005、朴 2018 など）。益岡（2007）では、「ね」がどのような機能を果たしているのかが問題になる点を（1）と（2）の例を示して説明している。

(1) A：いま何時ですか。

B：（時計を見て）7時ですね。

(2) A：あなた、車は外車でしょう？

B：ええと、日本車ですね。

益岡（2007：77、78）

（1）と（2）においてBは同じように「ね」を使用しているが、Bが提供する情報がA、Bにとって確定しているかどうかという点が異なる。（1）では「7時」という情報はA、B双方にとって未確定であったため、話し手Bがその情報について聞き手Aとともに確認するために「ね」を使用している。それに対して、（2）では「日本車」という情報は、話し手Bにとっては確定した情報であるが、聞き手Aにとっては確定していない情報だとBが判断している。そのために「ね」を使用している。

このように、日本語のコミュニケーションにおいて多く使われる終助詞には、話し手の発話意図を表すというモダリティ機能があるが、その使用には複雑なルールがある。日本語母語話者は暗示的知識を基に終助詞を適切に使い分けているので、そのような知識がない学習者がその使い分けを理解し、産出することには困難があると予想される。

3. 終助詞のコミュニケーション機能の分類

益岡（2007）が「よ」「ね」「よね」を「対話態度のモダリティ」の代表的な表現形式として挙げていること、また、日本語のコミュニケーションにおいて、「よ」「ね」「よね」が頻繁に使われることから、本章では、主に「よ」「ね」「よね」の機能に言及した研究を取り上げ、談話機能、情報のなわ張り理論、モダリティ機能と発話連鎖効力、それぞれに基づいた機能分類について述べる。

3.1 談話機能に基づいた機能分類

談話機能に基づいて終助詞の機能を分類している研究には、伊豆原（1993、1994）、井上（1999）がある。

伊豆原（1993）はラジオ番組の会話から終助詞「よ」と「ね」の機能を分析し、「よ」の主な機能は情報の「持ちかけ」で、「ね」は「共有化」であると述べている。つまり、「よ」と「ね」は聞き手が発話の内容についての情報をどの程度所持しているかによって使い分けられていると言える。伊豆原（1994）では、同じラジオ番組での発話を「ね」とその長音化の「ねえ」について分析し、「ね」にも情報の「持ちかけ」の機能があること、また、この「持ちかけ」の機能は聞き手に情報を教えるだけでなく、聞き手を話題に引き込みながら「聞き手の一体化・共有化を求

める」のものであると述べている（伊豆原 1994：103）。

「よ」「ね」を対象として分析した伊豆原（1993、1994）に対して、井上（1999）は「よね」の機能についてテレビ番組の談話資料をデータとして論じている。データ分析の結果、「よね」には「確認・同意要求」「自己確認」「同意」という3つの機能があると述べている。「よね」は、「よ」と「ね」がそれぞれ持つ「持ちかけ」と「共有化」両方の機能を有すること、そのため、発話場面と話者の意図によってその機能が異なってくると主張している。具体的に言うと、「よ」の「持ちかけ」機能を使用することで、話し手がある情報を聞き手に持ち出す。そして、「ね」の情報の「共有化」機能は話し手の発話意図によって異なり、それが「よね」の機能にも影響する。まず、「確認要求」の場合、(3)の例のように、「よ」は「若いときから結婚していた」という情報を聞き手に持ち出し、「ね」はその情報に対して聞き手の反応を要求して共有化を図る。それに対して、「自己確認」の場合、(4)の例のように、「よ」は話し手が伝えたい「オーダーメイドのまぐらのチェックポイントといえばまずは高さ」という情報を考えながら持ち出し、「ね」は聞き手ではなく話し手自身に対し確認をしている。そして、「同意」の場合、(5)のように、話者が聞き手の反応をうかがわず、話し手は自分が聞き手と同じ意見だと表すことが目的である。そのため、「同意」の場合の「ね」は「態度伝達」だと述べている。また、井上（1999）は「よね」は共有される情報に対する確認だけでなく、発話時のイントネーションによって「聞き手に対する配慮や気遣いを表す」効果もあると指摘しており、終助詞の機能を適切に表すためには音調も重要であることが示唆される。

- (3) もう若いときから結婚してたんですよねえ。 井上（1999：99）
 (4) オーダーメイドのまぐらですから、非常に、そのう、自分のチェックポイントとして、
 まず高さですよね。こう立ってるときのこの首の角度ですか。 井上（1999：111）
 (5) そうなんですよね。 井上（1999：110）

伊豆原（1993、1994）、井上（1999）は以上のように「よ」「ね」「よね」の談話機能について分類している。詳細においては異なる部分があるものの、どの分析においても「よ」は「情報の持ちかけ」、「ね」は「情報の共有」という機能があるという点では一致している。

3.2「情報のなわ張り理論」による「ね」の特性

「ね」だけに焦点を当てて分析している研究に神尾（1990、2002）、伴・架谷（1996）がある。神尾は「情報のなわ張り理論」という理論を提唱し、それに基づいて「ね」を分析している。この理論においては情報が話し手と聞き手のどちらのなわ張りにあるかによって、「ね」が文末に付けられるかどうかが決まる。つまり、「ね」が欠けると不自然になる必須の「ね」と、欠けても不自然にならない任意の「ね」に分けられるという。話し手と聞き手双方が情報を持っている場合、話し手がその情報に言及する際には「ね」が必須である。例えば、(6)のようにAとBが「今日はいい天気だ」ということを知っている、すなわち、両者にとって情報が近い場合である。一方、情報が聞き手に遠く、話し手にとっても完全に知っているとは言えない場合、話し手が情報の不確実性や情報に対するためらいを表す場合に「ね」を使用する。この場合の「ね」が任意と

されている。(7) では、A の質問に対して、B1 のように「ね」を使わなくても会話が成立するが、B2 のようにためらいや不確定性を伝える場合に「ね」を使用することが可能となる。

(6) A：今日はいい天気ですね。

B：そうですね。

(7) A：このお肉、いくらですか？

B1：250 円です。

B2：えーと、それは、250 円ですね。

神尾（2002：73）

伴・架谷（1996）は神尾（1990）の分析を発展させたもので、「ね」の使用条件、「ね」の義務性と随意性、「ね」の表現効果という3つの観点から「ね」の機能をまとめた。まず、義務性には「確認する」「同意を求める」「同意を表す」という3つの機能がある。「確認する」という「ね」は、(8)の例のような使い方である。「ね」を使うことで教師に試験について確認することが可能になり、会話の目的が達成できる。反対に、「ね」を使わないと、話し手Aの「確認する」という発話意図が伝わらない。したがって、この場合の「ね」には義務性があり、必須である。「同意を求める」という「ね」は、(9)の例のように、聞き手も自分と同じ認識を持っていると話し手が判断した場合に、聞き手の同意を求めるために使用されるもので、「ね」の使用が必須である。「同意を表す」という「ね」は、「そうですね」のような使い方、発話のあとに付くことで会話がスムーズになり、相手の反応を引き出しやすくなる表現である。この場合の「ね」も必須である。

一方、随意性には「聞き手と共通の認識を持ちたい」という機能があるとされている。(10)の「ね」には話し手が持っている認識を聞き手に投げかけるという意味が含まれている。この場合、話し手がもたらした情報は聞き手の知らない情報であるため、「ね」を使わなくても会話が成立する。相手に情報や意思を与えて共有させたい場合に、「ね」を任意に使う。

(8) A：先生、あしたの試験は9時からですね。

B：そうです。おくれないようにしてくださいね。

伴・架谷（1996：144）

(9) A：元気がありませんね。

B：ええ、きのうまで試験が続いちゃって……

伴・架谷（1996：145）

(10) 電話が来たらこちらへ回してくださいね。

伴・架谷（1996：146）

以上のように、情報のなわ張り理論に基づき「ね」を分析すると、「ね」の使用には必須である場合と任意である場合がある。情報のなわ張り理論による「ね」の考察が本稿の主目的ではないので詳細は述べないが、話し手自身の情報を不確定に述べることはできないため、(11)の例のように「ね」が使えない場合もある。

(11) A：お生まれは何年ですか？

B：*昭和12年ですね。

（神尾2002：75）

「2. モダリティの定義と終助詞の位置づけ」でも指摘したが、このような複雑なルールに基づいて母語話者は終助詞を使用しているのに、学習者がその使用を習得するのは難しいことは明らかである。

3.3 モダリティ機能と発話連鎖効力に基づいた機能分類

3.1 節で言及した伊豆原（1993）と井上（1999）は、談話資料を基に終助詞の機能を分析したが、終助詞の使用と談話進行との関連という観点からの談話分析は行っていない。それに対して、崔（2015）は「命題内容の事柄の領域を示すモダリティ機能」と「発話連鎖効力」という2つの観点から、終助詞「ね」「よ」「よね」がどのような機能を果たすかを分析した。音声付きの談話コーパスから文末に終助詞のある発話を取り上げ、談話における働きを検討するとともに、各終助詞の意味機能がどの程度使われているのかを分析した。

まず、1つめの分析観点である「命題内容の事柄の領域を示すモダリティ機能」という枠組は、「情報のなわ張り理論」を基にした高（2011）の「事柄の領域」という捉え方によるものである。「事柄の領域」は情報の所在によって、「聞き手領域の事柄」「話し手領域の事柄」「中立領域の事柄」という3つのカテゴリーに分類される。そして、話し手が聞き手の領域にある事柄について言及する場合には、その情報が聞き手の領域にあることへの配慮を示す必要があるため、終助詞「よ」「ね」「よね」が使用される。

次に、2つ目の分析の観点として、「発話連鎖効力」という概念があげられた。これは西郷（2012）が「よ」「ね」「よね」を対象に、3つの終助詞に共通している機能として定義したものである。終助詞には聞き手の後続発話を導く機能があり、会話を進行する働きをするという考え方である。西郷（2012）が提示した概念をもとに、崔（2015）は「よ」「ね」「よね」の発話連鎖効力には「聞き手の後続発話を導く」「話し手の発話権を管理する」「先行連鎖を終了させる（会話を終了する）」という特徴があるとした。さらに、3つの特徴によって終助詞の機能をカテゴリー化し、それぞれ「要求型」「提示型」「表明型」と名付けた。

崔（2015）の分析結果は表1のようにまとめられる。この表から「よ」と「よね」には5種類、「ね」には3種類の機能があり、「ね」には提示型の機能がないことが分かる。これは「ね」が話し手、聞き手双方が知っている情報を、話し手が強調したり聞き手の共感や同意を求めたりする場合に使われることが多いためである。このように、崔（2015）は伊豆原（1993）、井上（1999）の結果に比べ、終助詞の機能をより詳細にカテゴリー化した。表1で「よ」の「行動要求」が0回となっているのは談話コーパスにおいてはこの機能での使用が見られなかったことを示している。しかし、「かばんが開いていますよ」のように、注意を呼び掛ける機能があるため「行動要求」を「要求型」に含めている。

表1 「よ」「ね」「よね」のコミュニケーション機能の分類

終助詞 \ 類型	要求型	提示型	表明型
よ	行動要求 (0回)	情報提示 (39回)	意思表示 (34回)
ね	情報・意思の受入要求 (103回) 同意・共感要求 (22回) コメントの受入要求 (17回) 情報の確認要求 (2回)		同意・共感表明 (21回)
よね	共有の受入要求 (31回)	共有の提示 (28回)	共有の表明 (34回)

（括弧内は談話コーパスからの出現回数。崔（2015）の結果に基づいて作成）

4. 終助詞の機能と音調に関する研究

2章で言及した益岡（2007）は、モダリティ表現としての終助詞は文末イントネーションとの関係によって話し手の発話意図が変わるため、終助詞の役割はイントネーションも含めて検討する必要があると指摘し、その関係性を示すモデルの構築が望まれると述べている。そこで、本章ではこれまでに終助詞の音調について考察した研究を取り上げ、それらの研究の分析を整理する。

音調の分類や記述方法は研究によって多少異なる。小山（1997）は、終助詞を使用する際に文末イントネーションとして典型的に現れる音調には「降昇調」「昇調」「降調」「昇降調」の4種類があるとしている。小山（1997）と用語は異なるが、ほとんどの研究が文末イントネーションを上昇（＝昇調）、下降（＝降調）、いったん上昇してから下降（＝昇降調）、低いピッチからの上昇（＝降昇調）に分類している。研究によっては、平調というイントネーションも分類カテゴリーに含めている（伊豆原 1994）。一般的に、上昇イントネーションは問いかけや注意喚起、下降イントネーションは注意喚起、呼びかけ、言い切りという機能が含まれている（小山 1997）。また、記号で記す場合は、平調は「→」、上昇調は「↑」、下降調は「↓」、上昇下降調は「↗」、下降上昇調は「↘」という記述方法が用いられる。本章では、音調と機能を合わせて検討した研究の中から伊豆原（1994）、井上（1999）、轟木・山下（2008）を取り上げ、それぞれが行った終助詞の音調の記述について述べる。

4.1 伊豆原（1994）による終助詞「ね」の音調の記述

「ね」の音調と機能について、伊豆原（1994）は伊豆原（1993）に基づき、「ね」と長音化した「ねえ」の「共有化」の機能を以下の3つに細分化した。

- ①引き込み：話し手の持つ判断や情報を聞き手に持ちかけ、聞き手を話に引き込もうとするもの
- ②同意求め：話し手の持つ情報や話し手の判断が聞き手のそれと一致すると想定し、それに対して同意を求めるもの
- ③確認求め：情報は聞き手にあり、話し手がそれに対する自分の認識や判断を確認するもの

伊豆原 (1994) はこの3点に対してラジオ番組の音声データを資料として「ね」の機能別音調を考察した。この研究では「ね」が単独で使用される場合と語末・句末に使用される場合に分けて検討されている。「ね」が語末・句末に使用される場合は、「ね」の機能は①の「引き込み」であり、音調は平調か短い上昇調または上昇調である。この音調で発音されると、「話し手が話を持ち続ける中で聞き手の理解を確認し、聞き手を引き込みながら話している様子が伺える」と述べている(伊豆原 1994: 102)。

一方、「ね」が終助詞として文末に使用される場合、①②③の機能のどれかが当てはまる。まず、「引き込み」の場合、平調(→)、上昇調(↗)と下降調(↘)が音声データから見られた。(12)(13)(14)の例はそれぞれ平調、上昇調、下降調になる例である。これらの音調によって、話し手が会話を続けながら聞き手がこれまでの話を理解しているかを確かめながら会話を進行させるという役割があると指摘された。

- (12) 回答者：……水の表面に表面張力というのがあって、水の分子つぶつぶがね、引っ張りあっているものがあるわけですね。→膜みたいになっているわけだ。
- (13) 相談者：……あの、親御さんがちょっと見放した状態で(うんうん)現在もちょっと私の方からそのように目に映るんですね。↗(うんうんなるほどね)で、連絡しましてもあんまり……
- (14) 相談者：……ですから彼女の心の中はもう今どうしようかということで非常にゆれ動いているんですねえ、↘ええ。伊豆原 (1994: 102)

次に、「同意求め」の場合、下降調(↘)、上昇調(↗)と上昇下降調(↘↗)が見られた。(15)(16)(17)がそれぞれの例である。これらの音調によって、聞き手への一体化・共有化を求める形になり、発話へ引き込みながら聞き手の同意を求める効果があると指摘された。(15)(16)は話し手の判断への同意求めで、(17)は情報への同意求めである。

- (15) A：寒いねえ。↘/寒いね。↘
B：ええ。
- (16) (中略) アナウンサー：じゃあやちゃん、いいですね。↗(はい)
- (17) 回答者：朝顔とかあるいはひまわりの花、知ってますか。(知ってます) あれは種がなりますねえ。↘(うん) ねえ。(うん)伊豆原 (1994: 102-103)

最後に、「確認求め」の場合、終助詞「ね」の音調は前の音の高さより上昇する。(18)が上昇調になっているのは、聞き手から得た情報を正しく受け止めているかどうかを聞き手に確認しているためである。

- (18) アナウンサー：……アメンボはどうして沈まないで、こう、水の上ですいすい歩けるか、ということなんですね。↗(はい)伊豆原 (1994: 104)

4.2 井上（1999）による終助詞「よね」の音調の記述

「よね」のコミュニケーション機能と音調について、井上（1999）は「よね」の音調は「ね」の上昇と下降によって異なる効果を生み出すという観点から分析した。テレビ番組を談話資料として、現れた「よね」を機能別に分類し、その音調を検討した。この研究では平調を除く「昇調」「降昇調」「昇降調」「降調」という4つの文末イントネーションタイプを考察の対象にした。

井上（1999）では、談話資料に現れた「よね」の機能には「確認・同意要求」「自己確認」「同意」があることが示された。それぞれの機能に対応する音調を表2に示す。談話資料に見られた終助詞の談話機能に対応する音調を「○」で表示している。「○」のない箇所はその談話機能には対応しない音調である。例えば、「確認・同意要求」には、「昇調」「降昇調」「昇降調」が見られたが、「降調」は見られなかったことを表している。

表2 「よね」の談話機能と音調の対応

談話機能	昇調 [↗]	降昇調 [↘]	昇降調 ^{↗↘}	降調 [↘]
確認・同意要求	○	○	○	
自己確認				○
同意	○	○	○	○

井上（1999：95）

まず、「確認・同意要求」については、(19) (20) (21) がそれぞれ昇調、降昇調、昇降調の例である。この意味機能には昇調と降昇調が多く見られるが、(19) と (20) を比べると、(20) の降昇調のほうが聞き手の意向を伺う効果があると井上（1999）は指摘している。また、一般的に聞き手の反応や意見を伺うために、文末イントネーションを問いかけるように上昇させることが多い。「確認・同意要求」にも聞き手の反応や自分と同じような意見を求めるという発話意図が含まれるため、基本的に昇調イントネーションで発話される。

(19) それはでも、それは井川さんの責任じゃないんですよね。[↗] 井上（1999：107）

(20) はい、うわあ、（このホタテ）すごいですよねえ。[↘]（ねえ）なんというホタテでしょうか。
井上（1999：112）

(21) ふふふ、でも、ながいですよねえ。^{↗↘}もうわかいときから結婚してたんですよねえ。[↘]
井上（1999：105）

一方、(21) のように下降のイントネーションを含む昇降調の場合は、くどい印象が伝わると井上（1999）は指摘している。つまり、聞き手に対する配慮がなく、話し手の感情や意見が聞き手に率直に伝わることになる。また、表2から「確認・同意要求」には下降調が含まれていないことがわかる。これは井上（1999）によれば、「よね」の「確認要求」が質問機能を担っており、情報や態度に対して聞き手に直接肯定的な反応を要求するためである。

次に、「自己確認」については、(22) のように降調イントネーションしかない。これは「確認・

同意要求」とは反対に、聞き手の態度や意見を伺う必要がなく、話し手自身が持っている情報に対して確認しながら発話を進行させるからである。そのため、聞き手に何らかの反応を求めるという上昇調ではなく、そのまま下降調で発話される。

- (22) (中略) やっぱり自分に合ったまくらをつくると、必然的にそれくらいの値段になるそう
なんですよね。↘ やっぱり中身の素材ですとか、もう非常にこってますし。

井上 (1999 : 111)

「同意」の機能については、(23) ~ (26) のように、4つの音調すべてが談話資料に見られた。「同意」に下降調が含まれているのは、「自己確認」と同様に聞き手に反応を要求する必要がないためである。一方、「同意」に上昇調の音調が見られるのは、上昇調が聞き手への配慮を表し印象をやわらげる効果があるからだとして述べている。

- (23) それがいいよね。↗ 新鮮だよ。きつとね。 井上 (1999 : 105)

- (24) すごくおいしいですよねえ。↗ 井上 (1999 : 114)

- (25) そうですよね。↗ あんまり調理しないでよね。↗ こんなおいしいのあるんですもんね。

井上 (1999 : 114)

- (26) (中略) はーい、ありがとうございます。そうなんですよね。↘ じぶん合っているかどうか、そのへんが疑問なんですけど。

井上 (1999 : 110)

上述の伊豆原 (1994) と井上 (1999) は終助詞の機能に基づいて音調を記述した研究であるが、概ね文末イントネーションを上昇か下降かという基準で考えている。しかし、終助詞は文末イントネーションの一部であり、終助詞自体の音調を記述することは難しい。「上昇」「下降」と定義しても、それぞれをどのような音調と捉えるかは人によって異なると思われる。そのため、伊豆原 (1994) や井上 (1999) の分析のように、単に「上昇」「下降」と示すだけでは日本語教育に応用するのは難しいと思われ、異なる視点から終助詞の音調を記述する必要があるだろう。

4.3 轟木・山下 (2008) による終助詞の音調の記述

4.1、4.2 で説明した伊豆原 (1994)、井上 (1999) の記述方法とは異なる視点から終助詞の音調を検討した研究に轟木・山下 (2008) がある。この研究において、轟木・山下 (2008) は終助詞の音調をカテゴリー化する際に、終助詞の形態的意味や談話機能に合わせるだけでは不十分であると主張している。これは文が「上昇」「下降」のイントネーションで発話されていたとしても、終助詞を含めた文全体のイントネーションが不自然だと発話意図の伝達に影響が出るからである。

終助詞を含む文の音調は地域や話し手によって異なることが考えられる。そのため、轟木・山下 (2008) は、標準的な終助詞の音調を探るために異なる地方 (東京、大阪、岡山、香川) 出身の日本語母語話者を対象として、終助詞「よ」「ね」「な」「か」の音調を判断する調査を行った。

調査に用いられた文章は「桃だよ」「やるね」などのような平板型の短い文であった。終助詞の

部分を複数の音調で読み上げたテープを被験者に聞かせ、設定された場面の発話としてふさわしいと思う音調すべてに○をつけてもらった。具体的には、以下のような問題で、「私が今からやるね」という意図を伝える場合、「やるね」をどのような音調で発話するかを判断する。a～fの順番に異なる音調のテープを聞いて、ふさわしいと思う音調に○をつけるという方法である。

例：「私が今からやるね」と相手に言うとき

a () b () c () d () e () f ()

調査材料の作成に当たって、終助詞の音調を談話機能や会話場面に従って設定するとともに、終助詞の前の語の最終拍に対する接続の仕方と終助詞の拍内音調の組み合わせも検討した。それまでの終助詞の音調を検討した研究(伊豆原 1994、井上 1999)では終助詞自体の音調だけを検討していたが、轟木・山下(2008)は終助詞の音調は前接の語の最終拍の高さによって異なると考えた。そして、前接の語の音調との接続には「順接」と「低接」の2種類あるという観点を示した。「順接」とは前接の語のアクセント型に従ってそのまま接続するものであり、「低接」とは前接の語のアクセント型に関係なく低い拍で接続するものである。

井上(1999)は音調を「昇調」と「降昇調」、「降調」と「昇降調」とカテゴリー化していた。例えば、同じ「昇調」であっても、ただ上昇するだけか、いったん下降して最終的に上昇するかによって異なる音調となる。しかし、井上(1999)はなぜこのようなカテゴリー化になるのかは説明していない。轟木・山下(2008)が提示した観点は、その理由を前節の語の影響として説明できる。

一方、終助詞の拍内音調については、終助詞自体が聴覚的に上昇か下降かによって、少なくとも「上昇も下降もしない平坦」「上昇」「下降」「上昇下降」の4種類が存在する。轟木・山下(2008)はこの他に音声的な特徴から、「疑問上昇」と「アクセント上昇」があると述べている。例えば、「帰るの?」と聞く際は疑問上昇で、「帰るの!」と語尾を強くして主張する場合はアクセント上昇になる。つまり、話し手の発話意図によってその音調が異なってくる。

上述したように、轟木・山下(2008)は終助詞の音調を考える際には、単なる上昇あるいは下降だけを考えるのではなく、前の語の最終拍にどのように接続するのかを考えなければならないと主張している。さらに、終助詞自体の拍内音調には「疑問上昇」と「アクセント上昇」が存在し、前の語の接続の仕方と終助詞の機能と合わせることにより、話し手の心的態度が示されると指摘している。轟木・山下(2008)は終助詞の音調を前接の語との関係も含めて捉えようとしている点がそれまでの研究と一線を画しており、音声指導にも示唆を与える考え方だと言える。

5. 日本語学習者を対象にした終助詞研究の概観

3章、4章で終助詞のコミュニケーション機能やそれを実現するための音調について述べた。各終助詞の使い分け、各終助詞がコミュニケーションにおいて果たす機能、また、その機能に伴う音調など、重層的な知識があつて初めて終助詞の適切な使用が可能になる。これらの知識を学習者はどの程度習得しているのだろうか。本章ではその点について述べたい。

日本語学習者を対象にした終助詞に関する研究はさまざまな観点から行われている。終助詞の言語知識を筆記テストで検討した研究(大嶋 1989、文 2015)、メールや文字チャットのコミュニ

ケーションを通して終助詞の使用状況を検討した研究（船戸 2012、清家 2013）、口頭産出を通してその使用状況を検討した研究（大嶋 1989、初鹿野 1994、張 2005、何 2008）、終助詞の音調理解を検討した研究（轟木・山下 2008、2013）などがある。本章では、これらの研究を取り上げて、それぞれの研究でどのようなことが明らかになったのか記述する。

5.1 筆記テストを用いた研究

筆記テストを用いた調査には大嶋（1989）、文（2015）がある。大嶋（1989）は終助詞「ね（え）」「よ」に注目して、多肢選択式のテストを用いて学習者の終助詞の習得状況を調査した。被験者は日本在住の多国籍の中上級日本語学習者 14 名である。表 3 の機能設定に従い、質問項目が 8 つ設定された。問題例を下に示す。回答方法はもっともふさわしいと思う終助詞の後ろの括弧に 1 とつけ、2 番目によいと思う終助詞があればその後ろの括弧に 2 とつける。もし終助詞が必要ではないと判断した場合、「よ」と「ね」のいずれかの括弧に 0 とつけ、また他にふさわしいと思う終助詞があれば、予備の括弧にその終助詞を書き込む。このような多肢選択式の筆記テストによって、学習者の終助詞に関する知識が測定された。

表 3 大嶋（1989）の調査対象となった終助詞「ね（え）」と「よ」の機能

終助詞「ね（え）」	終助詞「よ」
① 軽い詠嘆の気持を含む判断	① 断定、言い張る、念を押す
② 軽い主張、念を押す気持	② 疑問の意に相手をなじる気持を添加する
③ 同意を求める、返答を促す	③ 命令、依頼の気持を少し強める
④ 質問、設問	④ 積極的な誘い

（大嶋（1989）に基づき筆者作成）

例：鹿児島の人：鹿児島はどうですか。

あなた：まあまあいいところです。

（あなたは鹿児島が気に入っていると想定します）

ね（ ） よ（ ） （ ）

大嶋（1989：111）

調査の結果、被験者 14 人中 10 人が約 60% 以上の正答率だったことから、終助詞「ね（え）」と「よ」の用法についてある程度の知識を習得していることが示された。終助詞を機能ごとに見ていくと、終助詞「ね（え）」の①「軽い詠嘆」、②「主張」、③「同意を求める」という機能は高得点を示した。それに対して、④「質問・設問」の「ね（え）」の得点が非常に低く、ほぼ未習得な状態であることが示された。終助詞「よ」については、①「断定」の「よ」の得点をもっとも高かったが（正答率約 60%）、②「なじり」、③「依頼」、④「誘い」も約 50% の正答率であり、その差は小さかった。このように、多肢選択式のテストから学習者は終助詞の機能についての理解力は、「どうでしょうかねえ」のような④「質問・設問」の「ね（え）」以外は、ある程度は習得していると考えられる。④「質問・設問」の「ね（え）」に関して、大嶋（1989）はそれが皮肉を含む表現であるため、

習得が進んでいないのだろうと考察している。調査対象者が14人と小規模な調査であること、また対象とした機能が限られていることから、結果の解釈には限界があるが、機能によって習得状況が異なることが示された点は興味深い。

文（2015）も「よ」と「ね」を意味機能ごとに分けて筆記テストを行ったが、大嶋（1989）が用いた多肢選択式ではなく埋め込みテストを用いている。文（2015）では、中国人日本語学習者の終助詞使用実態における問題点を明確するために、中国の大学で日本語を専攻する中国語母語話者40人（大学3年生、N2取得済み）を対象に、終助詞「よ」と「ね」を意味機能ごとに分けて埋め込み式のアンケート調査（合計40問）を行った。具体的には、以下の例のような問題である。設定された文に終助詞「よ」と「ね」を入れる文完成タスクで、この例のように、「よ」と「ね」両方も使える文もある。また、大嶋（1989）と異なり文章には場面設定がない。

例：A、B、Cの中から終助詞を1つ選んで、次の文を完成しなさい。

A：よ B：ね C：よ・ね（両方とも使える）

お茶でも飲みましょう（ ）。

文（2015：123）

学習者の回答から問題ごとに誤用率を計算し、誤用率の高い問題（誤用率60%以上）について検討した。その結果、「あの（ね）、あれがほしいんだけど。」のような決まった言い方の問題では全員正解であった。それに対して、「よ」が正解の問題、例えば「ここがです（よ）。ここが大事なんです。」のような問題では、「ね」を選ぶ誤用が多くみられた。この結果から文（2015）は「よ」の主張を表す、問い詰めと非難を表す、強調するという機能において特に誤用が見られると指摘している。

文（2015）は誤用率が高くなった理由について、「よ」と「ね」の具体的な機能を習得していないからだと述べている。しかし、誤用率が高い問題の多くは「よ」と「ね」両方が使える状況に設定された文であり、「よ」「ね」のどちらか一方しか選んでいない場合には不正解とされている。場面設定がされていないことから、このような文において学習者がすべての発話意図を想定するのは難しいため、1つしか終助詞を選ばない学習者が多くなるのは当然のように思われる。したがって、採点方法が結果の解釈に影響を与えていると言え、学習者の習得状況が正確に把握できているかどうか疑問が残る。

5.2 メールと文字チャットによる産出を分析した研究

学習者が書いた文章を分析し、学習者の終助詞の習得を検討している研究もある。本節では、学習者が作成したメール文を分析し、学習者による終助詞の誤用と正用について検討した研究（清家 2013）、学習者と日本語母語話者との間の文字チャットに見られる終助詞の使用について検討した研究（船戸 2012）について述べる。

清家（2013）は日本で学習する韓国人日本語学習者が調査者宛てに送った電子メール文を分析した研究である。メール文に現れた「よ」と「よね」について、学習者の正用と誤用を分析することで学習者がどの意味機能を適切に産出できているか、どの機能が適切に使えないのかを検討した。分析対象のメールの中で、「よ」が使用された文は23例、「よね」が使用された文は103例

であった。

「よ」が使用された学習者のメール文23例のうち、「よ」の使用が許容される用例は3例のみであった。学習者が「よ」を適切に使用できていた3例は、書き手が読み手の知らない情報について伝えるという機能であった。この機能は3.1節で述べた「よ」の情報の「持ちかけ」（伊豆原1993）、3.3節の「よ」の「情報提示」と同じものであると考えられる。つまり、相手が知らない情報を伝えるという機能に関しては、学習者が正しく使用できていたと考えられる。一方、23例のメール文のうち20例が誤用と見なされた。つまり、「よ」が過剰使用されていたことになる。誤用例として(27)が挙げられているが、清家(2013)はこの例について、学習者は「よ」の情報提示という機能は理解できているが、読み手の知らない書き手自身の状態を訴えているように受け取られる可能性があるため、不適切だと指摘している。つまり、学習者は、伝えようとする情報と相手との関係や、自分と相手との人間関係によって「よ」を使い分けるとのことまでは理解できていないと言える。

(27)「ところで、私、会社で間違いだらけですよ～」

清家(2013:4)

「よね」に関しては、(28)のように「確認要求」の機能を適切に使用することができていた。「よね」の誤用について、清家(2013)は「ノダヨネ」と「たよね」という形式に分けて検討した。まず、「ノダヨネ」の誤用例(29)では、読み手は過去の事実に対する書き手の気持ちや感想を理解できても共有する段階には至らない。そのため、「よね」の使用が適切ではないと指摘されている。「たよね」の誤用例として(30)が挙げられている。この例においては、書き手が読み手の知らない情報や気持ちについて同意を得ようとして「よね」を使用しているために誤用となると分析された。清家(2013)は読み手と書き手が共有した経験でない限り「たよね」を使用することが不適切だと述べている。例えば(30)で「月曜日があつという間に過ぎた」ということはあくまでも書き手自身の気持ちで、読み手も同じ気持ちとは限らない。そのため「たよね」は誤用になるという指摘である。以上のような学習者の誤用の分析から、学習者は「よね」を「確認要求」の機能で使用することはできるが、相手と情報を共有しているかどうかの使用の可否に関わるという点は理解できていないと言える。

(28)「(中略) 伝染病って本当に怖いですよね。」 清家(2013:6)

(29) (留学生が日本を旅行する際、筆者たちがそれをサポートしたことに対する感謝のメール)

「(中略) ★★(地名) に行ってよかったんですよ。」 清家(2013:9)

(30) (メールの挨拶部分)

「月曜日もあつという間に過ぎちゃいましたよね。早く週末が来てほしいです。」

清家(2013:9)

次に紹介する船戸(2012)は学習者のチャット文の産出において使用された終助詞を分析した研究である。清家(2013)が「よ」「よね」を分析対象としていたのに対し、船戸(2012)は「ね」

の使用を分析している。台湾在住の日本語学習者と日本在住の日本語母語話者各 10 名を対象に、文字チャット中の「ね」の使用状況を縦断的に調査した。母語話者と学習者の違い、および、学習者の「ね」の使用の変化を検討した。学習者と母語話者各 1 名を 1 組にし、週に 1 回計 12 回、文字チャットを 1 回 1 時間ほど行ってもらった。文字チャットのデータから現れた「ね」を抽出して毎回の「ね」の使用頻度を計算し、母語話者と比較した。分析に当たっては、抽出した「ね」を神尾（2002）の「必須」、「任意」という概念に基づき、必須の「ね」を「同意表明」「同意要求」「確認要求」、任意の「ね」を「自己確認」という機能に分けた。

調査の結果、文字チャットにおける学習者の「ね」の使用頻度が母語話者よりかなり低いことがわかった。母語話者は「同意要求」の「ね」をもっとも多く使っていた。次に多く使っていたのは「同意表明」と「確認要求」であった。一方、学習者の「ね」の使用には誤用が非常に多かった。それらの誤用は、聞き手のなわ張りに属していない情報で、話し手の確認行為が必要ない場合に「ね」をつけているというものであった。例えば、次の例のような誤用である。

例：嫌いなものもありますよ。私は納豆を食べられないんだね。 船戸（2012:6）

学習者の「ね」の使用の縦断的な変化としては、チャットの回数が増えるにつれて「ね」の使用も増えるという傾向が見られた。特に「同意要求」や「同意表明」という必須の「ね」の使用数が増えていた。つまり、母語話者の使用傾向に近づいていることが示された。このことから、母語話者との継続的な文字チャットのやり取りによって、必須の「ね」が適切に使用できるようになる可能性があると言えよう。

5.3 口頭産出を分析した研究

学習者の終助詞の口頭産出についても研究が行われている。メイナード（1993）によると、会話の中で使用される終助詞の中では「ね」がもっとも多い。そのため、これまで口頭産出によって学習者の終助詞使用を検討した研究のほとんどが、「ね」の使用に言及している。それらの研究では音声データを文字化し、学習者間、もしくは母語話者と学習者間の違いを分析することで、学習者の終助詞の習得過程や傾向を見ている。本節では大嶋（1989）、初鹿野（1994）、張（2005）、何（2008）を取り上げ、それぞれの研究で明らかになったことを記述する。

5.1 節で述べた大嶋（1989）は、筆記テストを実施する前に口頭産出の調査も行った。被験者は筆記テストと同じ、多国籍の日本語学習者 14 名である。調査においては調査者が学習者に 1 人 1 人個別に 8 つの質問をした。これらの質問は学習者が終助詞「ね（え）」と「よ」を使用せざるを得ないように設定された。(31) が質問の 1 例である。学習者の回答は、期待通りに終助詞を適切に産出した場合は 2 点、誤用と終助詞抜ききの表現は 0 点、終助詞を使用せず代替表現で産出し、会話として自然さを損なわない場合は 1 点と評価された。このテストにより学習者の終助詞の運用能力を測定するだけでなく、筆記テストとの関連、学習者の日本語学習歴、滞日歴との関連も検討された。

(31) 「ね(え)」の①軽い詠嘆についての質問項目

(霧島高原を背景にした美しい別荘のパンフレットをみせながら)

Q (調査者による質問): どう? きれいでしょ。

A (被験者による回答):

大嶋 (1989: 110)

調査の結果、まず全体として口頭産出において高得点を得た学習者は、筆記テストでも高得点であった。しかし、その一方、口頭産出の得点が低くても、筆記テストでは高得点を得ている学習者もいた。つまり、終助詞の知識と運用能力は必ずしも相関があるわけではなかった。この結果から、終助詞に関する明示的知識を習得しても、それが産出能力には結びついていないと言えるだろう。

次に、終助詞の機能ごとに分析した結果、どの機能も概して筆記テストの得点のほうが高かった。「ね(え)」では、筆記テスト、口頭産出テストともにある程度の得点を示した機能(①軽い詠嘆 ②主張 ③同意を求める)もあれば、どちらのテストでも低い得点の機能(④質問・設問)もあり、機能によって習得の度合いが異なっていることが示された。「よ」についても同様の傾向が見られたが、機能によっては「よ」ではなく代替表現が使われる場合があった(例: 出してきてよ→出してくれないか)。この他にも「依頼」の「よ」や「誘い」の「よ」にも代替表現が多く使われていた。学習者が研究者の意図通りに終助詞を産出しなかったことから、ターゲット語を誘出する方法をさらに工夫する必要があると言えるだろう。

また、口頭産出の得点と日本語学習歴、滞日歴との関係を検討したところ、口頭産出テスト得点は学習歴ではなく、滞日歴との関連が見られた。このことから、学習者が触れる終助詞を含むインプットの量が終助詞の産出に影響していることが示唆される。

初鹿野(1994)は、4人の初級日本語学習者の発話を1年にわたり収集し、そこに現れた終助詞「ね」に焦点を当てて分析した。「ね」の習得過程を明らかにすることを目的とした研究である。収集されたのは学習者と日本語教師との1対1の会話資料で、録音された音声データを文字化したものが分析された。初鹿野(1994)の調査では、全体的傾向として「ね」の使用数が少なかったことが目立っているが、4名のうち1名の学習者は1年の調査期間中に使用頻度が上がっていたが、他の学習者にはそのような傾向が見られなかった。したがって、学習歴は「ね」の習得の決定的な要因ではないと言えるかもしれない。一方、正用率については、初期段階では誤用が多くみられたが、後期になると正用数が増えていた。しかし、同時に濫用という現象が見られ、習得は一直線に進むものではないことが示された。

同じように学習者と母語話者との会話データを分析した研究に張(2005)がある。この研究は、台湾人日本語学習者を対象に、終助詞「ね」の使用状況を母語話者と比較している。設定された「ね」の意味機能は談話機能に基づいた分類で、「会話促進」「注意喚起」「発話緩和」「発話内容確認」「発話埋め合わせ」という5つである。会話データを文字化して、その中に現れた終助詞「ね」についてどの機能を担っているかを分析した。学習者の終助詞「ね」の使用頻度は母語話者よりはるかに低かったが、機能別に見ると「会話促進」と「注意喚起」の「ね」(例えば、「今はね」「この前ね」のような文を「ね」で区切って、話しを続ける用法)がもっとも多く使用されていた。これは母語話者と同様の傾向であった。しかし、学習者は総発話数に対するこの「注意喚起」の「ね」

の使用割合が高かった。張（2005）はこの「ね」には適切な使用頻度が存在し、その上限を超えてしまうと押し付けるようなイメージが聞き手に伝わり、注意すべきであると指摘している。

何（2008）も文字化した発話データを扱った研究である。この研究は中国人学習者と日本語母語話者の談話コーパスを資料として分析している。終助詞「ね」の意味機能を「同意要求」「同意受け入れ」「確認要求」「聞き手の発話に対する判断・意見・感想」「聞き手の質問に対する情報（知識など新たな情報）」「話し手の判断・意見・感想」「聞き手への依頼・勧め、感謝、謝り・要望」「話し手の質問」という8つに細分化し、日本語能力レベルと意味機能の習得との関連を検討した。その結果、日本語能力のレベルが上がると「ね」の使用が多くなり、正確に使用できる意味機能が多くなる傾向が見られた。具体的には上級の学習者は「聞き手の発話に対する判断・意見・感想」「話し手の判断・意見・感想」「確認要求」を使えるようになっていた。しかし、例えば「最近ニュースを見ましたか」という質問に対して「毎日見えていますよ」と答えるなど、上級になっても「ね」と「よ」を適切に使えないことが明らかになった。これは清家（2013:4）で挙げられた誤用例（27）「ところで、私、会社で間違いだらけですよ～」と類似したものだと考えられる。何（2008）はこのような誤用が起こる原因について、学習者は情報共有を図る時に、聞き手への配慮が足りないからだと考察している。

5.4 終助詞の音調の聞き取りを調べた研究

4.3節で轟木・山下（2008）が日本語母語話者を対象に行った終助詞「よ」「ね」「な」「か」の音調の聞き取り調査について述べた。この研究に続く轟木・山下（2013）では、中国人学習者と韓国人学習者を対象にして終助詞の音調と意味の対応について同様の調査を行った。轟木・山下（2008）の日本語母語話者の結果と比較するため、終助詞「よ」「ね」「な」「か」を対象に同じ調査材料を用いて、どの音調がどの発話意図になるかを判断してもらった。

その結果、学習者が日本語母語話者と異なる判断を示した問題もあった。また、中国人学習者と韓国人学習者の違いが見られた問題もあった。調査文の「やるよ」と「やるね」に対して、学習者が日本語母語話者と異なった判断を示したのは「早くやろうとうながす」の「よ」と「ちゃんと約束どおりやるね」の「ね」であった。この問題には学習者の母語による違いも見られた。日本語母語話者がどちらの場合にも共通して選んだ音調は「順接・疑問上昇」であったのに対し、中国人学習者は「早くやろうとうながす」の「やるよ」を、韓国人学習者は「ちゃんと約束どおりやるね」の「ね」を他の音調と結び付けていた。

半数以上の中国人学習者は「早くやろうとうながす」の「やるよ」に対して、「低接・平坦」の音調を選択した。これに対して、母語話者には「低接・平坦」と「早くやろうとうながす」の「やるよ」を結びつけている対象者はいなかった。つまり、中国人学習者は母語話者と全く異なる傾向を示したことになる。轟木・山下（2013）はこの結果から、中国人学習者が「よ」を使用する際にコミュニケーション上の問題が起こる可能性があるとは指摘している。

しかし、この研究は母語話者の理解を基準として学習者の判断を評価している。母語話者を対象にした轟木・山下（2008）の調査において、母語話者がすべての項目に対して、同一の選択をしたわけではなく、母語話者の判断にも揺れが見られた。正解が一つに定まっていない以上、音

調と意味機能の対応について、会話場面、話者の発話意図、態度などによって細かなイントネーションの変化が起こる可能性が考えられる。したがって、轟木・山下（2013）は学習者の終助詞の習得を音調の理解という観点から検討したことに新規性があるが、同時に限界もあると言えよう。音調の理解ではなく、学習者が発話意図をどのように音声産出するかを検討することで、学習者の終助詞の機能に対する理解の度合いがより正確に把握できるのではないだろうか。

5.5 学習者を対象とした研究についてのまとめ

5章では、日本語学習者を対象にした終助詞研究について述べた。筆記テストを用いた研究、メールや文字チャットによる産出を分析した研究、口頭産出を分析した研究、音調の理解を調べた研究を取り上げて、それらの研究で明らかになったことを述べた。しかし、それぞれの研究は対象とされた学習者の日本語レベルなどの属性や人数だけでなく、どのようなデータをどのような方法で分析しているか、どの終助詞を対象としているか、終助詞の機能という観点も含めているか、どのような機能分類に基づいて研究がデザインされているかなど、様々な点が異なり、統一した結果を導き出すことは難しい。しかし、その中でも以下のようなことは言えるのではないかと思われる。

- ・筆記テストの得点と産出能力はそれほど強い関連は見られない（大嶋 1989）。これは明示的知識が、必ずしも暗示的知識が必要な産出に結びつかないことの現れと考えられる。
- ・母語話者と比べると学習者は使用数が少ない。特に初級レベルでは少ないが、レベルが上がると使用数が増える。しかし、過剰使用にも結びつく（初鹿野 1994、張 2005、何 2008、船戸 2012）。このプロセスは第二言語習得のU字型発達が反映されている可能性がある。
- ・終助詞の機能によって、学習者が使うのが易しいものと難しいものがある（清家 2013、文 2015）。このことから一つの終助詞を対象として研究する場合にも、コミュニケーション機能ごとに検討する必要があることが示唆される。
- ・機能による音調の違いの聞き分けにおいて、学習者は母語話者とは異なる判断を見せた。また、母語による違いもあった（轟木・山下 2008、2013）。イントネーションによって発話意図が伝えられる。したがって、イントネーションと発話意図を間違えて結びつけて理解してしまうと、コミュニケーション上の誤解を生む可能性がある。
- ・終助詞の過剰使用や不適切な使用が見られた（張 2005、何 2008、清家 2013）。不適切に終助詞を使用することで、話し手が「意図していない発話意図」が聞き手に伝わってしまうと、聞き手に不快感を与えてしまう恐れがある。特に上下関係のある場合には問題になると思われる。

本稿で取り上げた先行研究の結果の中から、重要だと思われる知見を列挙した。学習者を対象とした終助詞研究はそれほど多くはない。今後さらに、理論的にも実践的にも貢献できるような研究を進めていくことが必要であろう。

6. まとめと残された課題

本稿ではまず初めに終助詞のコミュニケーション機能の分類について、いくつかの研究の捉え方を紹介した。談話機能に基づいた機能分類、「情報のなわ張り理論」による「ね」の特性、モダリティ機能と発話連鎖効力に基づいた機能分類という3つの分け方について説明した。終助

詞はモダリティ表現の1つであり、「対話態度のモダリティ」というカテゴリーに属する（益岡2007）。代表的な終助詞は「よ」「ね」「よね」であるが、その産出によって話し手の発話意図や態度が聞き手に伝達される。各終助詞には複数の機能があるが、そこにはイントネーションも関係している。どのような音調で発話するかによって同じ終助詞を使っても伝わる意図が変わってくるため、終助詞の使用に当たってイントネーションは非常に重要である。音声コミュニケーションにおいては終助詞が多く使われているが、これまでの終助詞研究においては終助詞の機能と音調を合わせて検討している研究は少ない。益岡（2007）が指摘しているように、今後は終助詞の機能とイントネーションの関係性を示すモデルの構築が必要であろう。

次に、日本語学習者を対象にした研究を概観したが、研究によって様々な方法が用いられていることもあり、学習者の終助詞の習得について断片的にしか明らかになっていない。筆記テスト、文産出、口頭産出など、どのようなデータ収集方法にも限界があるが、より適切な方法を模索し、精緻化していく必要があるだろう。特に、上述したように終助詞研究においても音調を含めて検討することが示唆されているので、今後の学習者を対象とした研究においても同様の方向性が望まれる。音調を含めて検討した唯一の研究（轟木・山下 2013）は、音調の理解に焦点を当てたものである。したがって、今後、学習者のイントネーションの産出についても検討することが必要である。

コミュニケーションにおいて終助詞が果たす役割が大きいのが、現在の日本語教育においては指導の焦点になっているとはいいがたい。イントネーションによって異なる発話意図、すなわち、パラ言語情報が伝わる（福岡 2013, 2016）が、この点についても十分な指導が行われてはいない。今後、学習者のコミュニケーション能力の養成のために、教室指導において終助詞やそのイントネーションに焦点を当てる必要があるだろう。すなわち、終助詞が含まれる音声インプットの量を増やすとともに、終助詞の機能と音調を合わせて指導することが重要であると考えられる。その際、指導の工夫とともに、どのような指導が効果的なのかという問題も明らかにしていくことも求められる。また、指導効果の検証だけでなく、音韻処理能力、発音に対するビリーフ、音声学習のストラテジー、コミュニケーションに対する意欲といった個人差が、終助詞の習得にどのように関わっているのかも明らかにし、学習者に合ったより効果的な指導を工夫していくことも必要であろう。

参考文献

- 伊豆原英子（1993）「『ね』と『よ』再考—『ね』と『よ』のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』No.80: 103-114.
- 伊豆原英子（1994）「感動詞・間投助詞・終助詞『ね・ねえ』のイントネーション—談話進行との関わりから—」『日本語教育』No.83: 96-107.
- 井上幸（1999）「『よね』のイントネーションと機能」『福岡 YWCA 日本語教育論文集』No.9: 85-118.
- 大嶋真紀（1989）「外国人の発話を不自然にする要因の分析—中・上級日本語学習者の終助詞の使用をめぐって—」『鹿児島大学史学科報告』No.36: 103-112.

- 何桂花 (2008) 「日本語教育における終助詞『ね』の習得の特徴—インタビュー形式の会話における中国語を母語とする学習者を中心に—」『日本語・日本文化研究』No.18: 117-126.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店
- 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- 小山哲春 (1997) 「文末詞と文末イントネーション」『文法と音声』97-119 くろしお出版
- 高民定 (2011) 「日本語学習者の『よ』『ね』『よね』について—日本語初級・中級教科書の機能分析を中心に—」『国際教育』No.40: 11-23.
- 崔英才 (2015) 「終助詞『ね』『よ』『よね』の談話上における機能分析—コーパス・データの母語場面の会話を中心に—」『千葉大学人文社会科学研究』No.31: 94-115.
- 西郷英樹 (2012) 「終助詞『ね』『よ』『よね』の発話連鎖効力に関する一考察—談話完成タスク結果を基に—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』No.22: 97-112.
- 清家健司 (2013) 「外国人留学生による終助詞『よ』『よね』の誤用に対する一考察」『國學院雑誌』No.114(12): 1-13.
- 白岩広行 (2011) 「第二言語としての日本語の終助詞習得研究の展望」『阪大社会言語学研究ノート』No.9: 66-95.
- 張鈞竹 (2005) 「台湾人日本語学習者の終助詞『ね』の使用—コミュニケーション機能を中心に—」『言語情報学研究報告』No.6: 281-299.
- 轟木靖子・山下直子 (2008) 「終助詞の音調における地域差と共通点—東京・大阪・岡山・香川を例として—」『日本語教育』No.136: 68-77.
- 轟木靖子・山下直子 (2013) 「終助詞『よ』『ね』の音調の聞き取りについて—中国語母語話者および韓国語母語話者の場合—」『比較文化研究』No.109: 27-39.
- 初鹿野阿れ (1994) 「初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察—『ね』を中心として—」『言語文化と日本語教育』No.8: 14-25.
- 福岡昌子 (2013) 「教育的視点から見たバラ言語情報—バラ言語情報の研究は大変だけれども面白い— (特集 ことばの名脇役たち 話しことば)」『日本語学』No.32(5): 63-75.
- 福岡昌子 (2016) 「音声の習得」『第二言語としての日本語習得研究の展望—第二言語から多言語へ—』32-42 ココ出版
- 船戸はるな (2012) 「継続的な文字チャットによる日本語学習者の終助詞『ね』の使用の変化—必須要素/任意要素の観点から—」『日本語教育』No.152: 1-13.
- 伴紀子・架谷真知子 (1996) 「誤用からみた終助詞『ね』の指導法」『アカデミア 文学・語学編』No.61: 135-156.
- 文鐘蓮 (2015) 「中国人日本語学習者の終助詞『よ』と『ね』に関する習得上の問題点」『中国研究論叢』No.15: 117-128.
- 朴美貞 (2018) 「終助詞『ね』の習得に関する研究概観—自由会話と空白埋めテストの結果に焦点を当てて—」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』No.12: 15-29.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- メイナード.K. 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版